

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK290608
種別	論文
タイトル	文章構成機能からみた外来語の基本語化
Title	Inclusion of Loanwords into the Basic Words: From the Viewpoint of Discourse-Organizing Function
著者	金 愛蘭
Author	KIM Eran
掲載号	29巻6号
発行日	2014年9月20日
開始ページ	211
終了ページ	226
著作権者	計量国語学会

論文

文章構成機能からみた外来語の基本語化

金 愛蘭 (東京外国語大学)

要旨

20 世紀後半の新聞文章では、具体名詞のほかに、抽象的な意味を持つ外来語も増加し、基本語化している。その多くは、和語・漢語の同義語・類義語があるにもかかわらず基本語化しており、その増加および基本語化の理由は言語内的に説明しなければならない。先に、金 (2006a) は、抽象的な外来語の多くが (和語・漢語の) 類義語の上位語となることによって基本語化していることを明らかにし、その背景に 20 世紀後半の新聞文章の概略化をあげ、「概略的な文体が概略的な上位語を必要とした」という語彙論的な説明を行った。本稿では、これに加えて、上位語が「先行叙述の指示・再表現 (名詞化) と後続文脈への展開」という文章構成機能をもつ点に注目し、自作の通時的新聞コーパスを用いた調査によって、抽象名詞の外来語が、指示語句と同格連体名詞という二つの形式 (用法) によって、再表現を核とする文章構成機能を獲得・発展させ、その使用量を増やしている事実を発見・提示する。これにより、抽象的な外来語の基本語化には、語彙論的な側面だけでなく、文章構成機能という文章論的な側面も関係するという見通しの妥当性を確認することができる。

キーワード: 外来語, 基本語彙, 基本語化, 指示語句, 同格連体名詞, 文章構成機能 (談話構成機能)

1. 目的: 外来語の基本語化の文章論的要因

20 世紀後半の新聞文章では、具体名詞のほかに、抽象的な意味を持つ外来語も増加し、その一部は、新聞の基本語彙の中に進出して「基本語化」^{注1}している (金 2006a・金 2011)。具体名詞の基本語化は、社会や生活の近代化といった言語外的な理由によって説明できることが多いが、抽象的な外来語の場合は、和語・漢語の同義語・類義語があるにもかかわらず基本語化するものが多く、その増加の理由^{注2}は言語内的な側面を中心に検討する必要がある。

例えば、1960 年ごろから新聞に使われ始めた「トラブル」という外来語は、1980 年ごろまでにはその意味・用法を 3 種 6 類にまで拡大させ、最終的には、「もめごと」「悶着」「けんか」「口論」「いさかい」「殴り合い」「衝突」「いざこざ」「ごたごた」「もつれ」「不和」「不仲」「故障」「不調」「不具合」「悩み」「疾患」「障害」「支障」「混乱」「事故」「事件」「不祥事」といった類義語の上位語の位置に立って、これらに共通する《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態》を「広く」「概略的に」表すことのできる、それまでの新聞語彙にはなかった「便利」な単語として成立している

(金 2006a). 20 世紀後半の新聞でこうした概略的な上位語が必要とされた背景には、新聞の文章、とくに社会面記事に代表される報道文が、「描写的（物語）」な色彩の強い文体から、事実を淡々と「概略的（要約）」に報告する文体へと変化したことがあり、同時に、そうした上位語の供給源として、すでに供給力を失いつつある和語や漢語に代わって、意味を（漢語に比べて）非分析的に表す傾向の強い外来語^{注3}が選ばれたと考えられるのである。

ただし、概略的な文体が概略的な上位語を必要とするという（言語内的な）説明は、おおむね妥当なものと考えられるが、基本語化の要因の説明がこれで尽くされるわけではない。なぜなら、上位語の特徴には、意味範囲が広い（上位概念を表す）という語彙論的な側面だけでなく、文章構成機能をもつという文章論的な側面もあるからである。例えば、Halliday and Hasan (1976) が「語彙的結束性」としてあげる「再叙（語彙的指示の同一性）」や、McCarthy (1992) の「談話構成語」、高崎 (1988) の「指示語句」などには、みな「上位語（による指示）」があげられている。上位語による指示とは、次のようなものである（氏名のイニシャル化および下線・囲み線は筆者）。

- (1) 大阪地裁で 23 日あった殺人事件の論告求刑公判（K 裁判長）で、殺された娘の遺影を手に傍聴していた母親（53）が、持ち込んだコードで被告の男性（20）の首を絞めたり、遺影の額のガラスを割って破片を法廷に投げつけたりする騒ぎがあった。関係者にけがはなかった。刑事裁判での遺影の持ち込みは、先月から各地で相次いで許可されているが、こうした「トラブル」は初めて。大阪地裁は「遺族としての気持ちの高ぶりもある。法的に事件にするかどうかは分からない」と話している。[2000 年 10 月 24 日朝刊社会]

ここで、「トラブル」は、「こうした」とともに、（直接には）先行する「騒ぎ」と（間接的には）その内容節（「殺された娘の～投げつけたりする」）を指示するとともに、それを上位概念（「トラブル」）に言い換えて再表現し、さらに、自らは主題となって「初めて」という叙述につながっていくという文章展開上の機能を發揮している。つまり、「トラブル」は、この種（指示＋再表現＋主題化）の文章構成機能を發揮するために上位語として新聞に多用され、その結果として基本語化したという可能性もあるわけである。上述の「概略的な文体が概略的な上位語を必要とする」という説明は、語彙論的な検討のほかに、こうした文章論的な検討をも加えることによって、より具体的なものにしていく余地を残している。

とはいえ、そのような検討を個別の外来語について行うには、それに先だって、抽象的な意味を表す外来語の基本語化に上のような文章構成機能の獲得が関係するという見通しの妥当性を確認しておく必要がある^{注4}。そこで、以下では、まず、外来語の文章構成機能の獲得と抽象的な外来語の増加傾向とが相関することを示す事実を、コーパス言語学的な調査によって発見・提示する。

2. 資料：通時的新聞コーパス

調査には、筆者が作成した「20 世紀後半の通時的新聞コーパス」（金 2011）を用いる。

同コーパスは、1950年から2000年までの『毎日新聞』から、ほぼ10年おきに、毎月3日分（5日・15日・25日）、各年36日分（全体では216日分）の朝刊（全国版）全紙面の記事（見出し・本文）を、1950年・60年・70年・80年は『縮刷版』からテキスト形式で入力し、1991年と2000年については『CD－毎日新聞データ集』から（毎日新聞社の許諾を得て）抽出して、作成したものである（抽出比率は、約10分の1）。コーパスの規模は、表1の通り。全体で1,600万字を超え、ページ数の極端に少なかった1950年、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ300万字程度となり、ここでの調査にも耐えうる規模をもつものと考えられる。

表1：通時的新聞コーパス
のデータ量

年	文字数
1950	793,692
1960	2,208,396
1970	3,183,297
1980	3,218,737
1991	3,265,786
2000	3,994,933
計	16,664,841

3. 調査1：指示語句

調査では、用例（1）のような「指示詞＋外来語」という形式に注目する。この形式は、上述したように、文章の前方の語句を指示しつつそれを名詞化し、かつ、後方へと展開するもので、文章構成機能を担うことが確実な形式である。ただし、指示詞は新聞文章で最も多用される「この」とし、外来語^{注5}も単純語であるものに限定する（合成語や句、固有名詞は除く）。すなわち「この＋単純外来語」（以下、「コノ語句」と言うことがある）という形式を例に、外来語の文章構成機能の獲得ないし発展の過程を観察するわけであるが、その際とくに注目するのは、外来語による前方語句の再表現の仕方である。

コノ語句には、以下に示すように、前方語句の再表現の仕方において、大きく三つの異なる方式が認められる（用例は、通時的新聞コーパスから）。

①繰り返し

文章の前方にある外来語と同じ外来語をコノ語句でも繰り返して用いるタイプ。（2）のように、同一の語（「エンジン」）を繰り返して使うことが基本だが、（3）のように、前方複合語の類概念を表す部分（「初心者マーク」の「マーク」）のみを用いる場合も、これに含める。後者の場合、コノ語句の外来語に類概念すなわち上位語を用いるわけで、次項の「言い換え」に重なる部分があるが、同じ外来語要素を繰り返すことを重く見て、この項に含めることにする。

（2）また大型人工衛星には予備の燃料を持ったエンジン¹を装備することもできる。このエンジン²によって人工衛星が大気の濃い層の中に入る時、衛星の速度を落としそれで燃焼を防ぐことができる。[1960年2月5日外電]

（3）アルバイトでためた金で安い中古車を買ひ、初心者マーク³をつけて規定通り走って、また驚いた。世の中の名ドライバーはこのマーク⁴を軽べつするようである。[1980年1月15日投書]

②言い換え

文章の前方にある語句を別の外来語に言い換えてコノ語句に用いるタイプ。(4)のように、外来語が前方語句の同義語・類義語である場合(「季節」に対する「シーズン」)と、(5)のように、上位語である場合(「喘息」に対する「アレルギー」)とがある。

- (4) うっとうしい梅雨期、ひきつづいてやってくる暑い夏—どちらも食欲の減退しがちで心身ともにゲンナリする季節だ。食欲の衰えは体力を低下させ病気を起こしやすくする。しのぎにくいこのシーズンを健康に乗切る方法はないものか。[1970年6月15日健康]
- (5) わたしは遺伝的に喘息があつて、若いときはその徴候はなかったが、戦争から帰って、喘息に苦しめられるようになった。いろんな療法をやったが、このアレルギーに対抗するものはなく、諦めるより仕方がないと観念していた。[2000年10月15日総合]

③捉え直し

文章の前方で述べられている叙述(事柄)を外来語一語で名詞化してコノ語句に用いるタイプ。前方で述べられる事柄は、句・文・連文・段落といった語より大きな形式をとり、場合によっては複数の段落に及ぶ場合もある。書き手は、そうした事柄を外来語一語で「捉え直す」ことによって再表現し、文章を後方へと展開していく。高崎(1988)は、このタイプの「指示詞+後要素」という形式を「指示語句」と呼び、その捉え直し(変容)のありかたを5種に分類しているが、今回の調査では、そのうちの「要約」(6)、「次元変換」(7)、「比喩」(8)、「形式化」(9)の例が確認できた。残りの「名づけ」については、「後要素」が臨時的な複合語になることが多いため、外来語単独の例はなかった。ただし、高崎(1988)は、これらの下位区分には重なりも大きく、排他的に分類することは困難と述べており、今回の調査でも、この下位区分の別は問題としない。

- (6) ローラー・ゲームがテレビで放送されたせいで、昨年は男の子の間にローラー・スケートの売れ行きが好調だった。だが、このブームもすでに峠を越したという例もある。[1970年3月15日家庭]
- (7) アミノ酸はたんぱく質の倉庫のようなもので、中のたんぱく質は絶えず古いものが分解され新しいものが作られている。「体が小さいほどこのサイクルが早く、アミノ酸の倉庫もいっぱいあるからうまい」とAさん。[2000年4月5日家庭]
- (8) いってみれば文化財保存側が経済開発側に“調和できます”と言い寄ったようなものだ。しかし、開発側がこのプロポーズに応じるだろうか。“片思い”ではないか。今後ほんとうに文化遺産を守る戦いを… [1970年9月15日総合]
- (9) とくに北の富士の左差しを完全に封じて先手をとったのは立派。「左差しでないと相撲がとれない」北の富士の速攻が生かされるかどうかはその“左差し”にかかっている。前乃山がこのポイントをおさえて、東土俵から向こう正面へ北の富士を押立てた。[1970年3月15日スポーツ]

いま、通時的新聞コーパスにおいて、これら3類に該当する（コノ語句の）外来語の量的推移（延べ）をみると表2のようになる^{注6}。また、図1は、各類の（100万字あたりの）換算値の比率をとって、その推移をみたものである。図1をみると、データの規模の小さい1950年を別にすれば、「繰り返し」が減り、「言い換え」と「捉え直し」が増えていることがわかる。

表2：コノ語句による再表現の方式（実数・換算値）

	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年
①繰り返し	9	79	142	125	46	45
	11.3	35.8	44.6	38.8	14.1	11.3
②言い換え	2	5	18	16	5	13
	2.5	2.7	5.7	5.0	1.5	3.3
③捉え直し	6	12	26	26	17	31
	7.6	5.4	8.2	8.1	5.2	7.8

※上段は延べ語数の実数、下段は100万字あたりの換算値

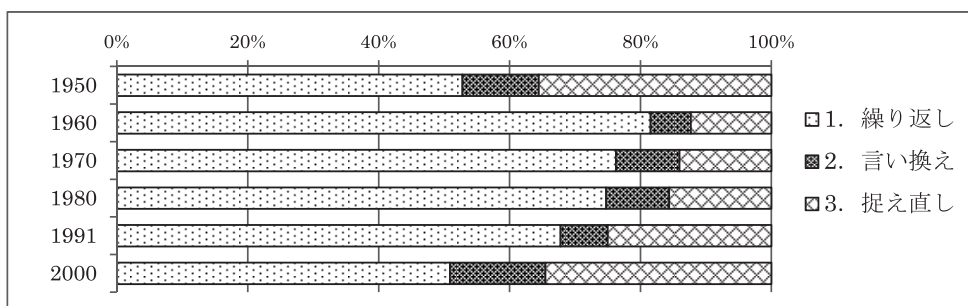


図1：コノ語句による再表現の方式（換算値の比率）

これを、コノ語句全体の用例数の推移（表3）と重ね合わせると、全体の用例数（換算値）が（1960年より）増えた70年・80年には「言い換え」の割合が増加し、そこから減少した91年・2000年には「捉え直し」の割合がとくに増加しているようにみえる。とすれば、コノ語句による再表現の方式は、初めは「繰り返し」が圧倒的であったが、まず「言い換え」が増え、次いで、「捉え直し」が増えるという過程を経て多様化してきたと考えられることができる。

表3：コノ語句の用例数

	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年
この＋外来語	19	103	196	175	71	93
	23.9	46.6	61.6	54.4	21.7	23.3

※上段は延べ語数の実数、下段は100万字当たりの換算値・小数点第二位四捨五入

コノ語句による再表現は、「繰り返し」＜「言い換え」＜「捉え直し」の順により複雑な方式になる。「繰り返し」は、同じ語を再使用するだけの最も単純な方式である。「言い換え」は、同義語・類義語や上位語に言い換える分、繰り返しより複雑であるが、基本的に単語どうしの言い換えであるという点では、なお単純である。それに比べて、「捉え直し」は、語より大きな単位の形式を一語で言い表す（名詞化する）より複雑な操作である。そして、コノ語句の再表現の方式は、20世紀後半の新聞コーパスにおいて、より単純なものから現れ、次第により複雑なもの加わるといった経過をたどっている。このことは、言い換えれば、20世紀後半の新聞では、少なくともコノ語句という形式において、より複雑な文章構成機能を外来語に負わせてきた（外来語が獲得してきた）ということを示すもの^{注7}である。

問題は、この複雑化の過程と、抽象的な意味を表す外来語の増加とが関係をもつかということである。そこで、上の3類の外来語について、『分類語彙表 増補改訂版』（国立国語研究所、2004）の大項目（部門）を用いて、その意味分野をみると（図2）、どの類も「1.3 人間活動」が4～5割を占めるが、それを別にすれば、「繰り返し」から「捉え直し」にかけて「1.1 抽象的關係」が増え、逆に、「1.4 生産物・用具」「1.2 人間活動の主体」が減っている。いま、宮島（1967）にならって、「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間活動」を抽象名詞、それ以外を具体名詞とみなすなら、より複雑な文章構成の方式（機能）になるほど、抽象名詞の外来語が増え、具体名詞の外来語が減っているといえる。

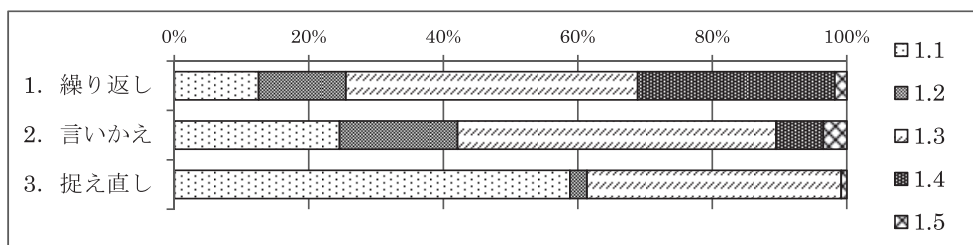


図2：コノ語句の方式別の意味分野構成比（延べ語数，換算値）

念のため、この意味分類を通時的な新聞コーパスにおける量的推移として表すと（図3）、これも語数の少ない1950年を別にして、総じて、具体名詞の外来語が減って（1.4は明ら

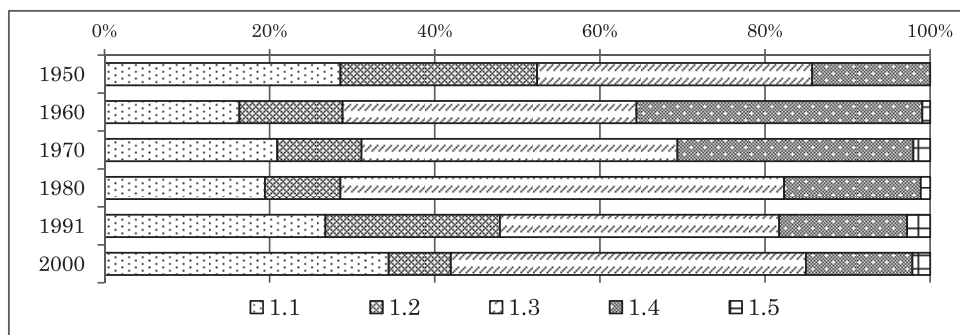


図3：コノ語句の意味分野構成比の推移（延べ語数，換算値）

かな減少, 1.2 は 1991 年を除けば微減), 抽象名詞の外来語 (とくに 1.1) が増えるという傾向がよみとれる。

「繰り返し」は, 同じ語の再使用であるから, コノ語句の外来語は具体名詞・抽象名詞のどちらでもよい。「言い換え」もどちらでもよいが, コノ語句の外来語が上位語の場合には, 意味の抽象度が増すので, その分, 抽象名詞が多くなる可能性がある。一方, 「捉え直し」は, 語より大きな単位で表現される事柄を名詞化するものであるから, 基本的には抽象名詞になる。再表現の方式 (文章構成の機能) の複雑化が抽象名詞の増加と関連する理由はここにある。

以上の事実は, コノ語句という形式で, 外来語がより複雑な文章構成機能を担うことと, 抽象的な意味を表す外来語が増加することとが密接に関係していることを示すものであり, このことは, さらに, 20 世紀後半の新聞にみられる「抽象的な事柄を表す外来語の基本語化」現象が, 外来語の文章構成機能の獲得・発展を言語内的な要因の一つとして生じている可能性を示唆するものである。

以下, この調査で得られたすべての外来語を, 年別・方式 (機能) 別・意味分野別に示す。カッコ内は複数回使用された語の度数である。

表 4: コノ語句に現れた外来語

5 0 年	①繰り返し [1.1]テンポ [1.2]グループ, チーム(2) [1.3]ゲリラ, スト [1.4]カバン, スタンド, メダル [1.5]
	②言い換え [1.1]スピード [1.2]パイロット [1.3][1.4][1.5]
	③捉え直し [1.1]ギャップ, コース, ジレンマ [1.2][1.3]イベント, インフレ, ニュース [1.4][1.5]
6 0 年	①繰り返し [1.1]アカデミズム, システム, セット, チャンス, パターン, リード(2) [1.2]アナウンサー, キャンプ, グループ(2), チーム(2), バッテリー, ブルジョア, マーケット [1.3]アピール, キャンペーン, クーデター(2), クレジット(3), コミュニケ, コンクール, シリーズ, スト(5), スポーツ(2), セミナー, ソナタ, タイトル, デザイン(2), デモ(2), パット, ミス, メッセージ, メモ(2), レース(2) [1.4]アパート(2), エンジン, カップ, キャップ, クリーク, シャンプー, スープ(2), スクータ, スポイト, ダイヤ(2), タンク, チェーン, テープ, パイ, バス, バッグ, ビル, ブラウス, プロペラ(2), ポスター, ボックス, ミサイル, ヨーグルト, ヨット, レンジ, ロケット, ワクチン [1.5]カール
	②言い換え [1.1]クラス, コレクション [1.2]チーム, モデル [1.3]クーデター [1.4][1.5]
	③捉え直し [1.1]アンバランス, スピード, チャンス(3), ペース, リード(2) [1.2][1.3]アピール, ニュース, プラン, プレー [1.4][1.5]

7 0 年	①繰り返し 1.1 アプローチ, クラス, コース, コーナー, システム(4), シンボル(2), セット(6), タイプ(2), ペース, ホーム, ルート 1.2 オルグ, カップル, カルテル(2), キャンプ, グループ(3), サラリーマン, チーム(3), トリオ(3), メーカー, モデル 1.3 アピール, アンケート, インタビュー, キャンペーン, クーデター, ゲーム(3), コミュニケ, コンクール(2), ショー, シリーズ(2), シンポジウム, スト, スローガン, セミナー, チャーター, テスト(2), デモ(5), ドクトリン, ドラフト, ニュース(4), ビジョン(2), ブーム(2), プラン, プログラム, プロジェクト, ペシミズム, ボーナス, マラソン, ミサ, ミス, メッセージ, モットー(3), ラリー, リスト, ルール, レポート 1.4 アパート(4), アンサンブル, エンジン(2), カメラ(2), クーポン, ゲート, スプーン, ダイアル, タバコ, ダム, タンカー, タンク(2), トラック, ノート, バス(3), パスポート(2), パンフレット, ビル(3), フィルム(2), プール, プレーヤー, プレス, ベルト, ヘルメット, ポスター, マイク, マッチ, マンション, メダル, ヨーヨー, ローター, ロープウエー, ロケット, ロボット(3) 1.5 ウイルス, ガス(2), ガソリン
	②言い換え 1.1 クラス(2), シーズン, ポスト 1.2 グループ, チーム, メンバー 1.3 ゲーム(2), サイエンス, ニュース, プロジェクト, レース(3) 1.4 ノート, ハイウエー, ランプ 1.5
	③捉え直し 1.1 ギャップ(2), ケース, コンディション, ショック, チャンス, データ(2), テンポ, バランス, ペース, ポイント, ムード, メカニズム, リード 1.3 アイディア(2), イデオロギー, エピソード(2), テーマ(2), トレーニング, ブーム, プロポーズ, レコード 1.4 1.5
8 0 年	①繰り返し 1.1 ギャップ, コーナー, システム(2), スポット, タイプ, チャンス, ムード, リスク 1.2 カップル, クラブ(4), グループ(3), センター, チーム, バッテリー, メーカー, レストラン 1.3 アピール, インタビュー, インフレ(2), ゲーム(3), コミュニケ, コラム, コンクール(4), サファリ(3), サミット, シナリオ(2), ジョーク, ショック, シリーズ(3), シンポジウム(4), スクープ, スト(2), スポーツ, スローガン, テキスト(2), テスト(2), ドクトリン(2), ドラマ, ニュース, パーティー(3), パザール, パズル, プレゼント, プログラム(2), プロジェクト(16), бойкот, マーク, メッセージ, メモ(2), ランキング, リスト, ルール, レポート 1.4 アパート, カード(4), ガス, カメラ, クルーザー, ケース, コイン, コンクリート, コンピューター, シャンツェ, センサー, テレビ, ドレス, ドレッシング, ナフサ(2), ビル(2), ファイル, ヘルメット, ホース, ミサイル, ミシン, メモリー 1.5 ウイルス, シーン
	②言い換え 1.1 ジャンル, タイプ, ペア, ルート 1.2 グループ, チーム 1.3 キャンペーン, ゲーム, コラム, コンテスト, シンポジウム, ニュース, プロジェクト(2), レポート 1.4 アルバム 1.5

	③捉え直し 1.1 エネルギー, クライマックス, ケース, タイミング, チャンス(3), データ, パターン, バランス(2), ピンチ, ペース(3), ムード, メリット, リード 1.2 ギャング 1.3 アイディア(2), ウィット, スカウト, デモンストレーション, ニュース, パラドックス 1.4 1.5
9 1 年	①繰り返し 1.1 コース, システム(2), ムード, ルート, レート 1.2 キャンプ(4), グループ(2), コンサルタント, スクール, スラム, ブローカー(3), ホテル 1.3 ガイドライン, キャンペーン, コピー(2), シンポジウム(3), スポーツ, テーマ, デモ, パーティー(2), マーク, リポート, レース 1.4 カード, シャンプー, タンカー, テレビ, パーク, ファクス, ペーパー, ヘリ(2), マスタード, ロープ 1.5 シーン
	②言い換え 1.1 システム, データ 1.2 グループ 1.3 アンケート 1.4 1.5 ホルモン
	③捉え直し 1.1 システム, タイミング(2), データ(2), ヒット, ペース(2), ルート 1.2 1.3 エピソード, シナリオ, プラン, プロジェクト, ペシミズム, リポート(2), ルール 1.4 1.5
0 0 年	①繰り返し 1.1 エリア, コース, サービス, サイト(2), システム, スキャンダル, セット, タイプ, ペア, ページ, ポーズ 1.2 クラブ, グループ, レストラン 1.3 ガイドライン, キャンペーン(3), ゲーム, サービス, サミット, シュート, スクープ, セレモニー, テスト, トーナメント, プロジェクト(2), ホームページ, マーク(2), メッセージ, モール, ルール 1.4 エンジン, ソフト(2), タオル, テーブル, ドレッシング, ナイフ, プール, マンション(2), レール 1.5
	②言い換え 1.1 タイプ 1.2 チーム(3) 1.3 コラム, コンペ, シリーズ(3), セレモニー(2), レース 1.4 1.5 アレルギー
	③捉え直し 1.1 ケース, サイクル, システム(2), スケジュール, タイミング, タイム(2), チャンス(2), パターン, パワー, プロセス, ポスト(2), リード, ルート 1.2 1.3 アイディア(3), アドバイス, イメージ, ウェート, オファー, シリーズ, ニュース, メッセージ(2), ルール 1.4 1.5 シーン

4. 調査2：同格連体名詞

ところで、通時的新聞コーパスを用いた上の調査では、コノ語句に用いられた「トラブル」の例は見られなかった。他の指示詞（的語句）との組み合わせでは、「このようなトラブル」（80年投書）、「今回のトラブル」（80年総合，91年社会，2000年3面）、「この種のトラブル」（91年社会）、「こうしたトラブル」（2000年特集）の6例があるが、それでも多くはない。「トラブル」は、指示語句という形式で文章構成機能を発揮することにさほど活発ではないといえそうである。これには、通時的新聞コーパスの規模が、個別の外來語の文章構成機能の獲得過程を観察するにはなお十分ではないという理由も考えられるが、「トラブル」の文章構成機能は別の形式で発揮されることが多いという可能性も考え

られる。そのような観点からコーパスに現れた「トラブル」の用例を検討すると、次のような同格連体名詞（奥津 1974）の例が注目される（ここでは、(11) のような「などの」を介する形式も含める）。

(10) KDDI グループの携帯電話「c d m a O n e」のメールサービスが 24 日、サーバーの不調のため、全国で 4 時間以上接続できないトラブルがあった。[2000 年 12 月 25 日社会]

(11) …テレビ放送会社の都合により番組の内容変更や制作中止になっても、それまでにかかった費用がプロダクションに支払われなかったり、作品の納入後に委託代金が減額されたりするなどのトラブルの原因になっていた。[1991 年 9 月 5 日 3 面]

同格連体名詞とは、いわゆる外の関係の連体修飾節構造で、連体修飾節の表す事柄と主名詞（被修飾名詞）とが同一（同格）の関係に立つ場合の、主名詞のことをいう。ここで、同格連体名詞は、連体修飾節の叙述内容を名詞化して再表現し、後続の文脈の叙述につなげていくという点で、指示語句とよく似た文章展開上の機能を發揮している。異なるのは、同格連体名詞は連体修飾節の直後に置かれてそれを直接受けるので、指示語句のように、指示詞を使って前方の叙述を指示する（ことを明示する）必要はないという点である。要するに、指示語句も同格連体名詞も、先行叙述の再表現（名詞化）という点では同じ文章展開上の機能を持つといってよい。とすれば、「トラブル」は、指示語句よりも同格連体名詞という形式で、同様の文章構成機能を發揮している可能性がある。表 5 は、「トラブル」の同格連体名詞用法の量的推移をみたもののだが、用例数は多くないものの、期間の後半に増加していることは明らかである。

表 5: 「トラブル」の同格連体名詞用法

1950 年	1960 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年
0	0	1	1	3	11
0.0	0.0	0.3	0.3	0.9	2.8

（上段は使用頻度の実数、下段は 100 万字当たりの換算値・小数点第二位四捨五入）

同格連体名詞の用法が増加した外来語には、「ケース」もある。金（2006b）は、通時的新聞コーパスの旧版（毎月 2 日分（5 日と 25 日）、各年 24 日分）を使って、「ケース」がとる四つの形式、すなわち、「単独（で）」「合成語（の構成要素として）」「名詞句（における被修飾語として）」「連体修飾節構造（における被修飾語＝同格連体名詞として）」の割合がどのように推移しているかを調べ、表 5 のような結果を得ている。図 4 は、その帯グラフである。「ケース」は、20 世紀後半をとおして、同格連体名詞となる用法が増えてきたことがはっきりとわかる。

表 6:「ケース」の各形式（用法）の使用量

	1950 年	1960 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年
単独	0	2	7	6	2	3
	0.0	3.8	6.0	2.8	0.9	1.6
合成語	0	4	11	7	8	1
	0.0	7.5	9.5	3.3	3.8	0.5
名詞句	0	10	30	23	19	23
	0.0	18.8	25.8	10.7	8.9	12.6
連体修飾節構造	0	11	33	43	53	91
	0.0	20.7	28.4	20.0	24.9	49.9

※上段は使用頻度の実数，下段は 100 万字当たりの換算値・小数点第二位四捨五入

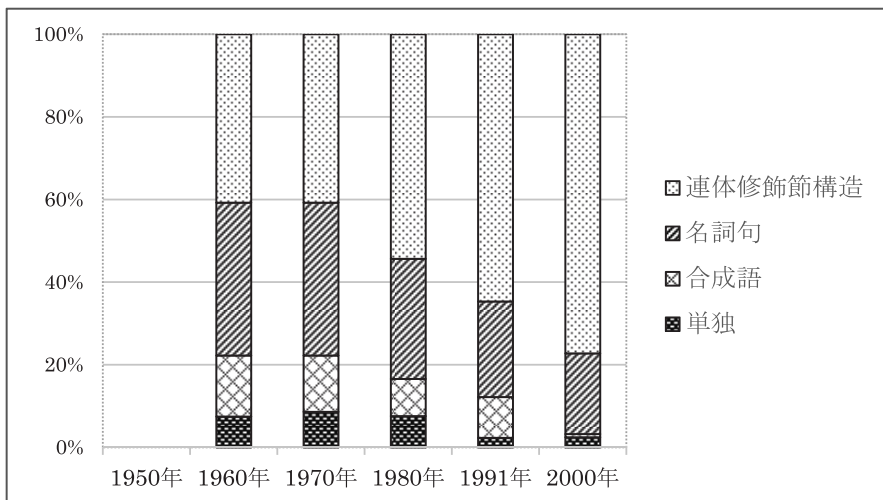


図 4:「ケース」の各形式（用法）の構成比

ここで、再び通時的新聞コーパス（毎月 3 日分）を使って、同格連体名詞となる外来語の量的な推移を調査する。ただし、すべての連体修飾節構造を拾い出すことにはなお時間を要するので、ここでは、検索の便宜上、(12) のように、連体修飾節と主名詞との間に「という」が介在する形式に限ることとする^{注 8}。

(12) ただ、あまりにも流れから取り残されると、国際社会から「日本は朝鮮半島和平に逆行している」というイメージをもたれかねない。[2000 年 10 月 25 日国際]

表 7 に、年ごとの異なり語数・延べ語数（カッコ内は、100 万字あたりの換算値）と、初出の異なり語数をまとめた。これをみると、同格連体名詞の外来語は延べ・異なりの両方において 1950 年から 70 年にかけて増え、その後は横ばいといった状況である（1991 年に減少する理由は不明）。

表 7: 同格連体名詞の外来語

	1950 年	1960 年	1970 年	1980 年	1991 年	2000 年
延べ	3 (3.78)	16 (7.25)	38 (11.94)	45 (13.98)	21 (6.43)	50 (12.52)
異なり	3 (3.78)	10 (4.53)	27 (8.48)	24 (7.46)	15 (4.59)	24 (6.01)
初出	3	10	18	12	7	8

表 8 に、この調査で得られたすべての外来語を、年別・意味分野別に示す。同格連体名詞の意味分野については、奥津（1974）や大島（2010）が連体修飾節との関係も考慮した詳細な分類を行っているが、ここでは、抽象名詞か具体名詞かの別のみを問題とし、指示語句と同様、『分類語彙表』の意味分野に基づくことにする。これを見ると、ほとんどの外来語が「1.1 抽象的關係」か「1.3 人間活動」に属しており、同格連体名詞の外来語の増加は、抽象名詞の外来語の増加につながる事がわかる。同格連体名詞による文章構成機能の獲得・発展もまた、抽象的な意味を表す外来語の基本語化をもたらす要因の一つであると考えられよう。

表 8: 同格連体名詞に現れた外来語の一覧

50 年	<u>1.1</u> ジレンマ, ハンディキャップ <u>1.3</u> テーマ
60 年	<u>1.1</u> ケース, システム, スケジュール <u>1.3</u> エピソード, サービス, スローガン, デマ, ニュース <u>1.4</u> プラカード, レッテル
70 年	<u>1.1</u> アンバランス, ケース, システム, ジレンマ, スケジュール, ステップ, データ, パターン, ハプニング, ペース <u>1.3</u> アドバイス, アピール, インフレ, エッセー, エピソード, ジンクス, スローガン, ゼスチュア, テーマ, デマ, ニュース, ファイト, ルール <u>1.1/1.3</u> サイン, プラス, ムード <u>1.4</u> パンフレット
80 年	<u>1.1</u> ギャップ, ケース, コース, システム, ジレンマ, スケジュール, タイプ, データ, ニュアンス, パターン, ハプニング, メリット <u>1.3</u> アイデア, イメージ, エピソード, スティグマ, スローガン, タイトル, ニュース, ファイト <u>1.1/1.3</u> サイン, ショック, スキャンダル <u>1.1/1.5</u> シーン
91 年	<u>1.1</u> データ, ハプニング, メリット <u>1.3</u> エッセー, コメント, コンセンサス, シナリオ, スローガン, タイトル, テーマ, ビジョン, ポリシー, メッセージ <u>1.1/1.3</u> プレッシャー, ムード
00 年	<u>1.1</u> ケース, ジレンマ, スタンス, データ, ネット, パターン, プロセス, メリット, モチーフ, リスク <u>1.3</u> アナウンス, イメージ, ウオーキング, エピソード, コメント, シナリオ, ジンクス, テーマ, ニーズ, ニュース, ポリシー, メッセージ <u>1.1/1.3</u> プレッシャー, ムード

では、なぜ、「トラブル」は、先行叙述の再表現（と後方の叙述への展開）という文章構成機能を發揮する形式として、指示語句よりも同格連体名詞をとることが多いのだろうか。前述したように、指示語句と同格連体名詞の違いは、先行叙述の指示の仕方にある。指示語句は、先行叙述とそれを再表現する外来語との間に距離があるため、外来語の前に指示詞を置くが、同格連体名詞は、連体修飾節という構造上、そうした必要がない。一方で、「トラブル」は、奥津（1974）では「客観的同格連体名詞」、大島（2010）では「事実名詞」に分類されるように、事実の報告を旨とする文章、新聞でいえば報道文などで使われることが多い語である。報道文は、社会面記事に代表されるように、多くの場合、凝縮的に書かれることが多いから、先行叙述との間に距離を置く指示語句より、連体修飾節と直接に結びつく同格連体名詞の方が採用される可能性が高まる。したがって、報道文に現れることの多い「トラブル」は、指示語句より同格連体名詞となることの方が多くなるのではないだろうか。実際、先に紹介した「このようなトラブル」以下の指示語句は、投書、総合、3面、特集、社会（2例）の各紙面に現れているが、解説記事や署名記事が多く、報道文は1例のみである。一方、同格連体名詞は、全16例中、社会面が11例を占め（他は、スポーツ2例、1面1例、3面1例、家庭1例）、そのほとんどが（10）のような報道文である。もちろん、これだけの例で確たることは言えないが、指示語句か同格連体名詞かという選択に、文章の凝縮性という文体的側面がかかわっている可能性を指摘することはできよう。

5. 結論：文章構成機能の獲得による基本語化

以上、本稿では、外来語の文章構成機能の獲得・発展と抽象的な外来語の増加傾向とが相関するという事実として、指示語句と同格連体名詞という二つの形式（用法）を見出した。すなわち、抽象名詞の外来語が、この二つの形式によって再表現を核とする文章構成機能を獲得・発展させ、その使用量を増やしている事実を発見・提示したわけである。これにより、抽象的な外来語の基本語化に、語彙論的な側面だけでなく、文章構成機能という文章論的な側面も関係するという見通しの妥当性を確認することができた。

指示語句と同格連体名詞とは、いずれも、先行する叙述を名詞化して再表現し、後続の叙述につなげていくという文章展開上の機能を持つ。この機能は、Halliday and Hasan（1976）の再叙に用いられる「上位語」や「一般名詞（general noun）」、McCarthy（1992）の「談話構成語」、高崎（1988）の「指示語句の後要素」などと重なるもので、抽象的な意味をもつ語によって發揮される代表的な文章構成機能である。20世紀後半の新聞文章は、抽象的な外来語にこうした機能を担わせ、その結果として、新聞基本語彙の中に抽象的な外来語が進出することを招いたといえる。これまで、外来語の増加は、具体名詞を中心に、言語外的な要因と結びつけて語彙論的に説明されることが多かったが、抽象的な意味を表す外来語については、文章論的な説明を加えることも必要となり、また、可能であることが、本稿の調査結果により明らかになったように思う。

注1 「基本語彙」とは、語彙の中心部にあつて、「使用率が大きく、しかも対象とする言語作品あるいは言語体系の中に幾つかの層を設けて考えることができる場合（略）、できるだけ多くの層に出現する語の集合をいう」（『国語学大辞典』『語彙』の項、樺

島忠夫による)。本稿でいう「基本語」とは、このように規定される「基本語彙」の要素の意であり、したがって、「基本語化」とは、それまで非基本語彙の位置にあった単語が基本語彙の仲間入りをすることと定義できる。

注2 国立国語研究所(1965)は、「類義的な外来語のふえる理由」として、1. 即物的な事情(「キャッシュ／現金」のように、専門語であった外来語が一般語化する場合など)、2. 適用範囲などの上での違い(「プロポーズする／申し込む」のように、外来語の意味範囲が限定されて使われる場合など)、3. 外来語とその訳語との共存(「ピッチャー／投手」など)、4. 感情的・心理的な理由(a. 目新しさ・新鮮さ、b. 明るい・自由な感じ、c. より強い実感、d. 高級そうな感じ、e. 不快な語感・連想を避ける)をあげる。ただし、これらがそのまま基本語化の「理由」とされているわけではない。

注3 外来語が漢語・和語に比べて非分析的(=総合的)であることについては、宮島(1977)参照。

注4 抽象的な外来語の増加については、佐竹(2002)、橋本(2010)の報告もあり、また、森田(1993)も「客体に関する語彙から主体に関する語彙への移行」としてその一端を捉えている。とくに橋本は、「ケース」「レベル」「テーマ」「システム」「バランス」「ルール」「イメージ」といった外来語が、社説の「説明」「論述」部分で多用される「論説用語」として機能している事実を指摘して、抽象的な外来語の増加を文章論的な機能の面からも説明している。ただし、こうした論説用語に外来語が進出していく理由については、それらの文章構成機能に注目していく必要があるものと考えられる。

注5 外来語の認定および抽出には、解析辞書の「UniDic1.3.8」の語種情報を利用した。詳しくは、金(2011)を参照されたい。

注6 集計には、現場指示や後方照応など、再表現がなかった32例を含んでいない。

注7 本稿では、外来語が、指示語句と同格連体名詞という二つの形式(用法)によって、再表現を核とする文章構成機能を獲得・発展していくことを中心に述べた。こうした機能をもつ「談話構成語」は、当然ながら、和語と漢語にも見られるものであるが、和語・漢語における文章構成機能の獲得過程がどのようなものであり、また、それらが外来語における獲得過程にどのようにかわったのかという点については、なお調査が必要である。今後の課題としたい。なお、高崎(2013)は、「環境」「点」「問題」「姿勢」「経営姿勢」「経営姿勢の変化」といった漢語やその連語、また、「一方」「ため」など形式名詞に近い漢語や和語の文章構成機能を詳しく論じている。

注8 連体修飾節構造における「という」の介在可能性の問題は、その主名詞に立つ外来語の範囲には影響しないものと考えられる。

文献

Halliday, M.A.K. and Hasan, R. (1976) Cohesion in English. London. Longman. [安藤貞雄ほか訳『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房, 1997]

McCarthy, M. (1992) Discourse Analysis for Language Teachers. Cambridge Language Teaching Library. CUP. [安藤貞雄・加藤克美訳『語学教師のための談話分析』大修

- 館書店, 1995]
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論—名詞句の構造—』 大修館書店
- 金愛蘭 (2006a) 「外来語『トラブル』の基本語化— 20 世紀後半の新聞記事における—」
『日本語の研究』 2-2
- 金愛蘭 (2006b) 「新聞の基本外来語『ケース』の意味・用法—類義語『事例』『例』『場合』との比較—」『計量国語学』 25-4
- 金愛蘭 (2011) 『20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』『阪大日本語研究』
別冊 3 号
- 国立国語研究所 (1965) 『類義語の研究』 秀英出版
- 佐竹秀雄 (2002) 「新聞の生活家庭面における外来語」玉村文郎編『日本語学と言語学』
明治書院
- 高崎みどり (1988) 「文章展開における“指示語句”の機能」『国文学 言語と文芸』 103 号
- 高崎みどり (2013) 「文章中の語彙の機能について—“テキスト構成機能”という観点から—」山崎誠ほか『国立国語研究所共同研究報告 12-06 テキストにおける語彙の分布
と文章構造 成果報告書』国立国語研究所
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 ひつじ書房
- 宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究 第 3 集』 国立国語研究所
- 宮島達夫 (1977) 「語彙の体系」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』 岩波書店
- 森田いずみ (1993) 「客体から主体へ—外来語への意味構造分析的アプローチ—」『国語学』 175

付記

本稿は、文部科学省科学研究費補助金「基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究」(平成 23～25 年度, 若手研究 B) の研究成果の一部である。稿を成すにあたり, 「第 3 回コーパス日本語学ワークショップ」(国立国語研究所, 2013 年 2 月), 「Japanese Language Variation and Change Conference」(国立国語研究所, 2013 年 3 月) で口頭発表を行い, 有益な教示・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

(2014 年 4 月 13 日受付)

Paper

Inclusion of Loanwords into the Basic Words: From the Viewpoint of Discourse-Organizing Function

KIM Eran (Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract:

I continue a study to elucidate the factors of “Inclusion of Loanwords into the Basic Words” in the newspaper texts written in the second half of the 20th century. KIM (2006a) showed clearly that “inclusion of many abstract loanwords into the basic words” occurred when the loanwords turned into synonymous superordinate of Japanese origin “*Wago*” and Chinese origin “*Kango*”, and gave lexical stylistics explanation that summarization of the newspaper texts in the second half of the 20th century needed many loanwords as superordinate words. In this paper, focusing on discourse-organizing function of superordinate, I found the fact that abstract noun loanwords were increasing the amount used to acquire and develop the discourse-organizing function (reiteration is core) by two forms (usage) of demonstrative phrase and noun (phrase) in apposition.

The result confirms the validity of the prospect that discourse-organizing function relates to inclusion of abstract loanwords into the basic words.

Keywords: loanwords, basic words, inclusion of loanwords into the basic words, demonstrative phrase, noun (phrase) in apposition, discourse-organizing function